アセスメントツールの活用：TTAP・幕張版の実践ガイド

「実施して終わり」から「対話と計画への反映」へ



想定読者：支援員、サービス管理責任者、管理者
目的：アセスメントを「義務的な書類作成」から「本人との対話と支援計画の羅針盤」に変えるための実践的ノウハウ。

NotebookLM

現場で起きがちな「もったいない」パターン

アセスメントツールは強力な地図ですが、多くの現場で「死蔵される書類」になりがちです。貴事業所でこのようなことは起きていませんか？



アセスメントツール運用状況

- [x] 年1回の恒例行事化：実施日だけ頑張り、結果はファイルに閉じて終了。
- [x] 担当者任せの解釈：数値結果だけで判断し、担当者によって読み方が異なる。
- [x] 本人不在の評価：本人に結果が共有されず、「評価されただけ」という感覚を残す。
- [x] 計画との断絶：アセスメント結果が、実際の個別支援計画に反映されていない。

NotebookLM

ツールは「判定機」ではなく「対話の材料」

ツールのスコアは正解ではなく、支援の仮説を立てるための「素材」に過ぎません。

ツールのスコアは正解ではなく、支援の仮説を立てるための「素材」に過ぎません。

× 誤った認識（Judgment）



- テストの採点
- 一方的な評価
- 能力のランク付け

○ 正しい認識（Dialogue）



- 利用者理解のための地図
- 強みや課題の共有言語
- 本人と話し合うためのプラットフォーム

重要：結果を本人に返し、チームで解釈し、計画へ「翻訳」して初めて意味を持ちます。

NotebookLM

なぜ「数値だけ」見てはいけないのか

数値結果のみを見て「この人は対人が苦手」と断定するのは危険です。そこには重要な「条件差」が抜け落ちているからです。

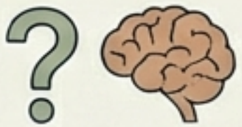
体調：その日の睡眠不足や疲労度は？



環境：実施場所は静かだったか？刺激が強すぎなかったか？



理解度：設問の意味を正しく理解できていたか？





結論：これらを無視すると、本人の本来の強みが見えなくなります。評価そのものより「評価後の対話設計」が成否を分けます。

NotebookLM

運用を成功させる5つのステップ



NotebookLM

Step 1: 実施前に「何を知りたいか」を絞る

漠然と実施するのではなく、目的を3つ以内に絞ることで、解釈のブレを防ぎます。

Action 1: 目的の言語化



「作業持続の阻害要因を知りたい」
「報連相の課題点を探りたい」など
具体化する。

Action 2: 本人への事前説明



「あなたの得意なことや、困っていることを一緒に整理するために使います」と
使い道を伝える。

Pro Tip: 全利用者に一律実施するのではなく、必要性と負担のバランスを見て選択実施するのが実務的です。

NotebookLM

Step 2: 数値だけでなく「条件」を記録する

再現性を判断するため、最低限以下の「コンディション」をセットで記録してください。

状況記録シート（Context Log）

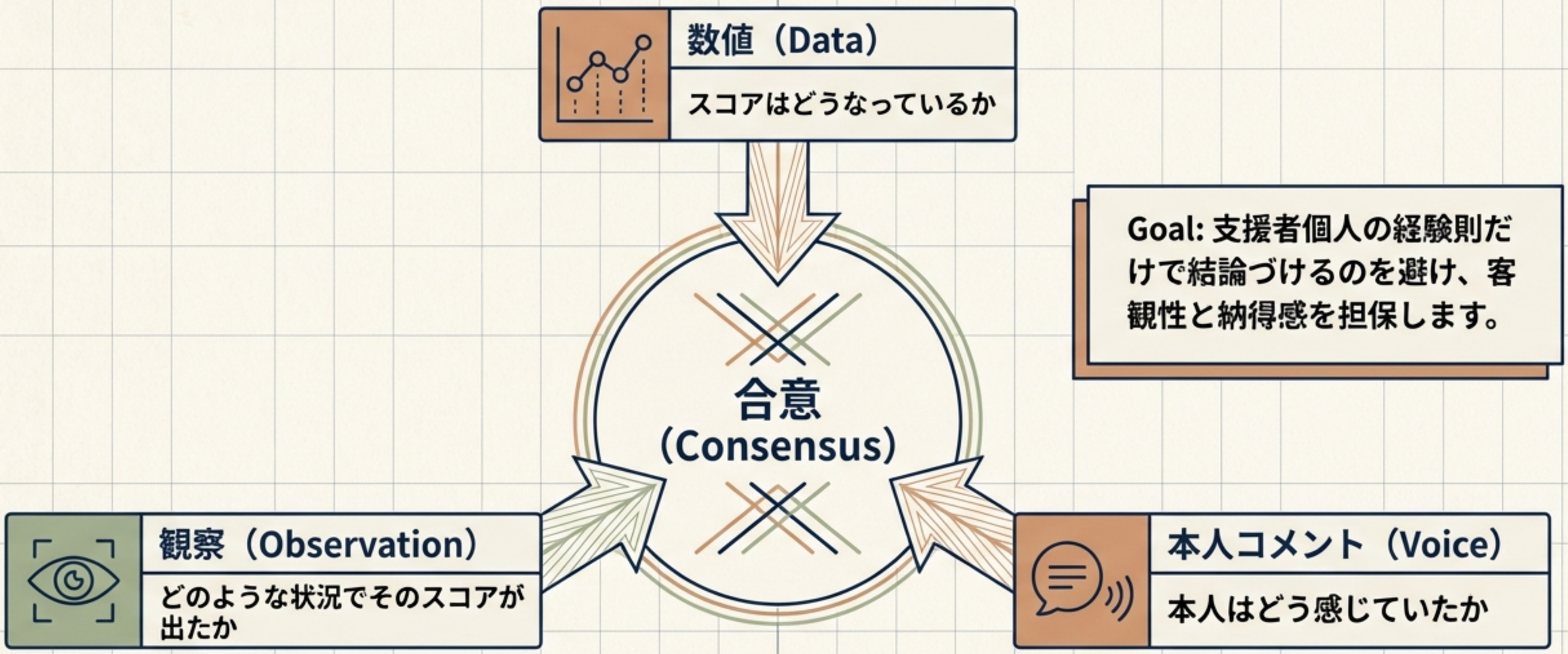
- ■ 実施時間帯：[　午後　]（眠気が出やすい時間帯）
- ■ 前日睡眠状況：[　△　]（中途覚醒あり）
- ■ 環境：[　個室　]（静かな環境で実施）
- ■ 説明理解：[　○　]（手順はスムーズに理解）

これを残すだけで、
データの価値が
変わります。

NotebookLM

Step 3: チームで解釈し「個人の思い込み」を防ぐ

主担当者一人だけで判断しないこと。複数の視点で「強み」「配慮点」「伸びしろ」を整理します。

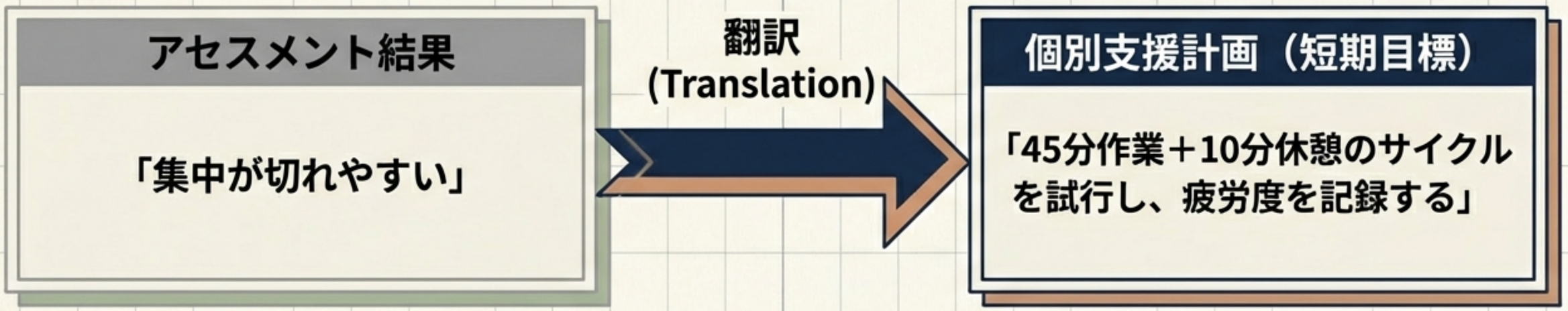


Goal: 支援者個人の経験則だけで結論づけるのを避け、客観性と納得感を担保します。

NotebookLM

Step 4: 結果を「短期目標」へ翻訳する

アセスメント結果は、個別支援計画に直結させます。



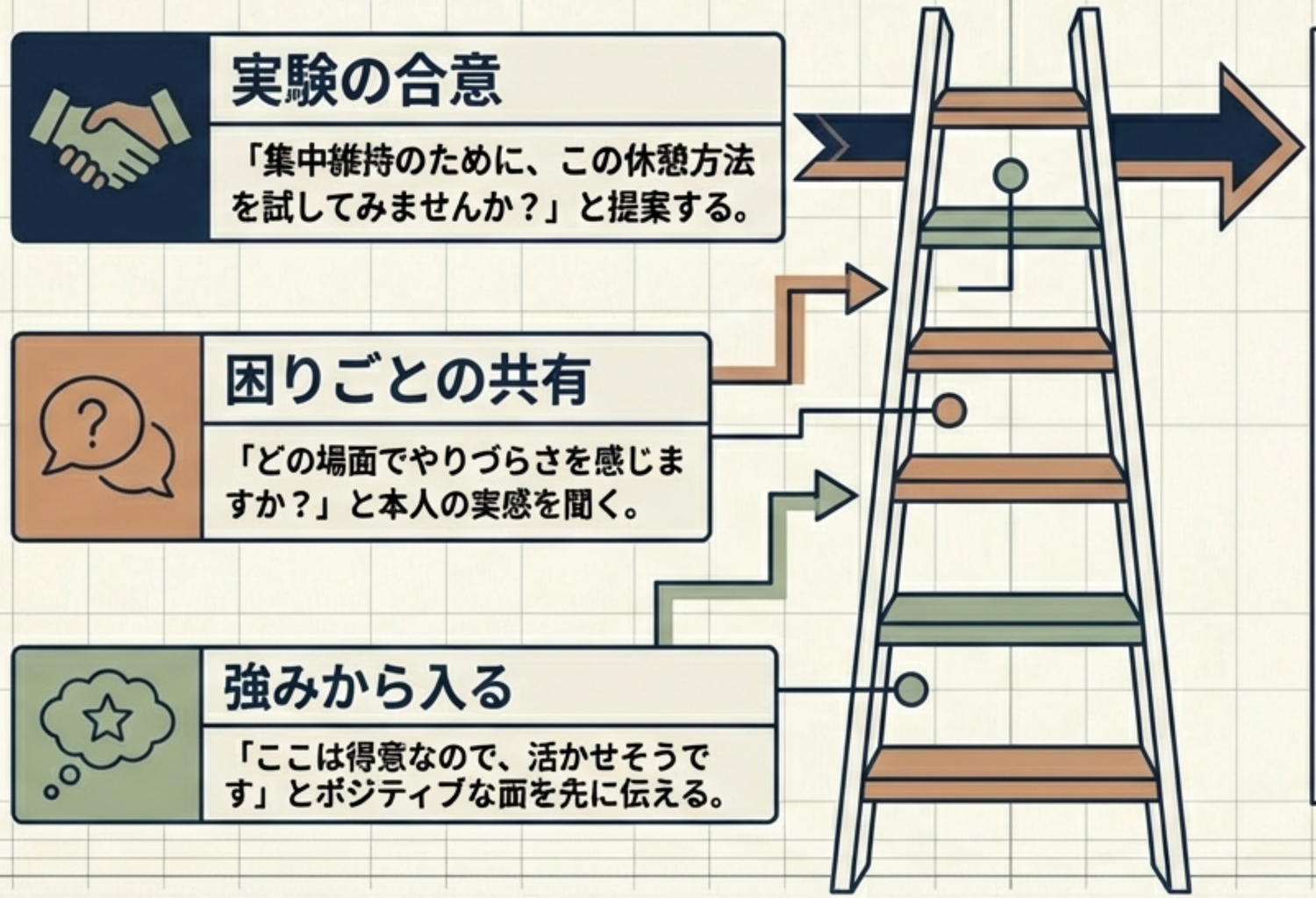
Implementation Rules:

1. **1つ以上反映:** 結果から導き出された課題や強みを、必ず短期目標に組み込む。
2. **期間設定:** 2〜4週間で実施効果を確認できるスパンで設定する。

NotebookLM

Step 5: 「強み」から始まるフィードバック

結果説明は、課題の指摘ではなく、今後の作戦会議です。



実験の合意

「集中維持のために、この休憩方法を試してみませんか？」と提案する。

困りごとの共有

「どの場面でやりづらさを感じますか？」と本人の実感を聞く。

強みから入る

「ここは得意なので、活かせそうです」とポジティブな面を先に伝える。

Outcome: 支援者が一方的に決めるのではなく、本人と「実験」を合意するプロセスにします。

NotebookLM

事例：C事業所での導入成果

Before（課題）

- ツール結果が記録ファイルに残るだけで活用されない。



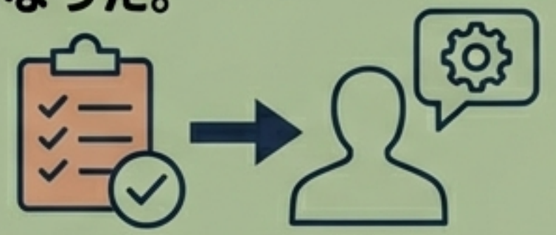
- 支援根拠が曖昧。



実施内容：
目的固定・解釈会議定例化
・計画反映必須化

After（変化）

- 根拠の明確化：支援調整の理由を論理的に説明できるようになった。



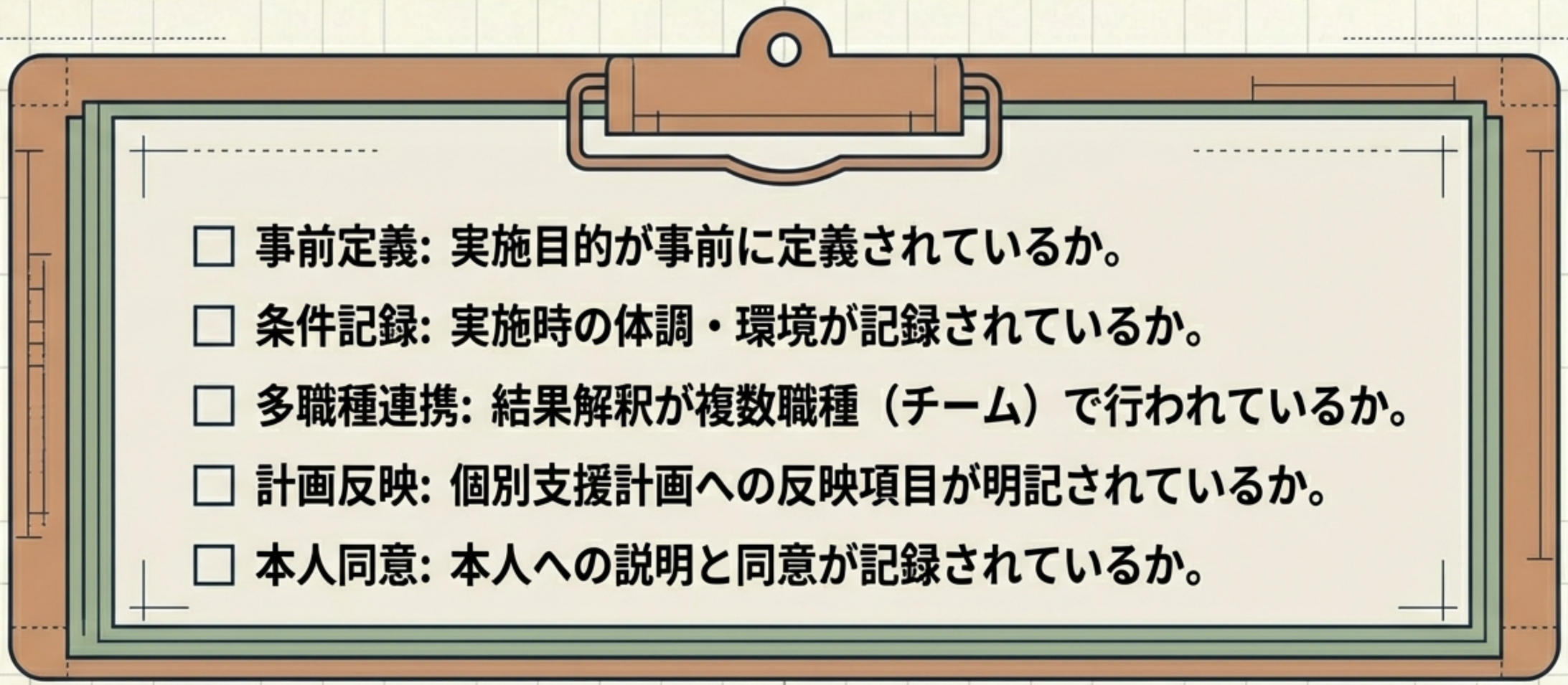
- 満足度向上：本人へのフィードバックにより、納得感が生まれた。



NotebookLM

管理者向け：運用品質チェックリスト

貴事業所のアセスメント運用は適切ですか？以下の項目で監査してください。



- ☐ 事前定義: 実施目的が事前に定義されているか。
- ☐ 条件記録: 実施時の体調・環境が記録されているか。
- ☐ 多職種連携: 結果解釈が複数職種（チーム）で行われているか。
- ☐ 計画反映: 個別支援計画への反映項目が明記されているか。
- ☐ 本人同意: 本人への説明と同意が記録されているか。

NotebookLM

運用の「見える化」指標（KPI）

システムが機能しているか、数値でモニタリングします。

計画反映率



本人説明実施率



再評価実施率



NotebookLM

よくある質問とトラブルシューティング

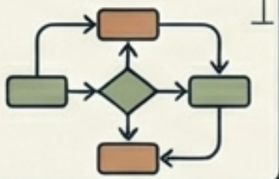
Q: 再評価の間隔は？

A: 支援目標の周期に合わせ、3〜6か月を目安にします。



Q: 結果と現場感覚がずれる時は？

A: その「ずれ」こそが重要情報です。再観察し、環境要因や条件差を確認した上で、支援仮説を再設定してください。



Q: 実施者によって結果が変わるのを防ぐには？

A: 手順と解釈会議のフォーマット化で「属人化」を防ぎます。





Note: 失敗の多くは「本人に結果を返さない」ことから始まります。必ず結果の意味を共有してください。

NotebookLM

アセスメントを「生きた支援」にするために



ツールは使い方次第で強力な支援資源になります。

今日から「ファイルに閉じて終わり」をやめ、利用者さんとの対話を始めましょう。

NotebookLM